

連載17 「過剰な頑張りの中で生きる～良い子症候群～」

明星学園には、「良い子症候群」と称している一連の行動があります。「本当はやりたくないと思っている行動なのに、＜過剰に＞頑張ってしまう行動」のことを示しています。

例えば、登校しぶりの小学1年生。昨日の夜は明るく元気に宿題も終え、明日の準備をしていたのに、翌日の朝になったら急にお腹が痛くなって、「学校に行きたくない」と言い出します。これにはお母さんもびっくり。でも、励まして学校に行かせれば、学校では朝、お腹が痛かったような素振りも見せません。そんな状況が何日も、時には何ヶ月か続きます。さすがに心配になって、学校の担任の先生に相談すると、「大丈夫ですよ。元気にやっていますから。学校に来てしまえば全く問題ありません」とのこと。ところが、そんなある日、断固として学校に行かなくなってしまいます。励ましても、ひきずって車で送ろうとしても暴れてしまって断固拒否です。

こんな時、お腹が痛くても学校へ行っていたのは、過剰に頑張っているという姿として捉えることができます。そして、お腹が痛くなったのは、過剰に頑張っている心に、いち早く身体が頑張りが過ぎていくよと送っていたサインだと言えるでしょう。学校に行きたくないと願っているお母さん、そして学校に来て欲しいと願っている担任の思いに応える形で、また学校とは、どんなことがあっても行くべきところだという社会的な常識に応える形で彼は学校に頑張っているのです。

実は、この「良い子症候群」の姿は、重度知的障がいの方々においても出現します。「まさかー」が世間の常識かもしれませんが、最近起こった、わかりやすいできごとから、その真実に迫ってみたいと思います。

A男さん、2週間ほど先にあるお花見ドライブへの参加を相談しました。マイクロバスに乗って1時間ほどのドライブをして、学園に戻り体育館でみんないっしょに個々に頼んだお好みのお弁当を食べるというイベントです。春の恒例の行事です。多くの人たちがマイクロドライブにも参加し、みんなでお弁当を一緒に

食べることを楽しみにしています。

彼は、片言を話すことができる人ですが、こんな相談ごとの時には、○×カードを使います。彼は、マイクロドライブも体育館でお弁当も両方とも○、フルコースの参加を選びました。

が、翌日にお花見ドライブを控えた夜、彼は眠ることができません。バタバタと深夜まで廊下を行ったり来たり、ソワソワと落ち着きません。支援職員が対応に苦慮していると、彼は「さくら」「だめ」と叫んだのです。これでやっと彼のソワソワの原因がわかりました。もう一度○×カードで相談するとマイクロドライブは×、みんなでお弁当は○でした。この相談の後、彼はぐっすり眠ることができたのです。

本当は、行きたくなかったマイクロドライブ、でも「どうもみんなが行くらしい」「マイクロドライブに行くことは良い子がすることなんだな」「お弁当は食べるのにマイクロドライブに行かないのは変だよね」「お母さんもきっとみんなと一緒にマイクロドライブに行きたくて欲しいと思っているよね」…。こんな数々の思いが、彼の頭の中を支配していたのでした。

B男さん、このところなんだか怒りっぽい日が続きます。「いつ頃から？」と調べると、どうも公園に遊びに行きたくて滑り台やブランコに乗った日から？のようです。彼は片足が術後のリハビリ中で前のように十分に歩くことができません。居住棟の中では、まだ車椅子に乗っている姿を見かけます。そこで次の外出では、車椅子使用を徹底しました。彼が「歩く」と言っても「車椅子を使おう、甘えてもいいんだよ、頑張らなくても良いんだよ」と車椅子使用を押し付けたのです。そして、車椅子使用の外出後、彼の怒りっぽさは消失したのでした。彼の頭の中は「頑張っている人は良い子」なのでした。「甘える人は悪い子」だったのでした。

本当の気持ちを隠して、良い子で生き続けることは、自分らしい人生を生きることとは真逆のできごとです。たとえ、重度の知的障がいがあっても、本当の気持ちを伝えることでできるような環境＜みんなちがってみんないい＞を整えていきたいものです。